

第 1 章

漢方薬の 特質

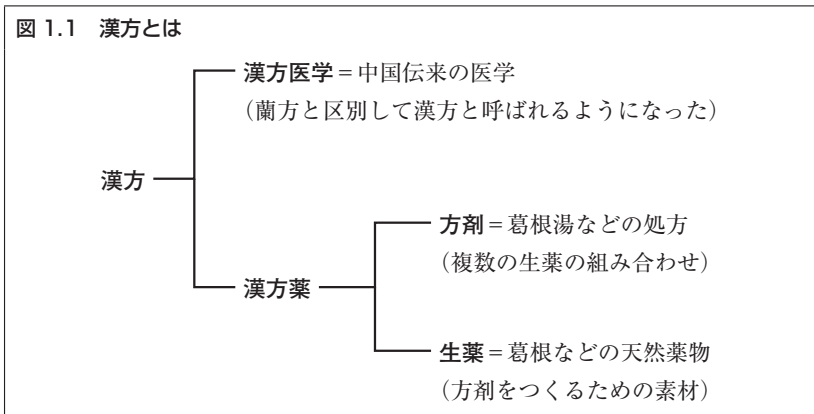
1.1 漢方という言葉の意味

漢方医学と漢方薬

日本人が漢方という言葉を使うようになったのは、江戸時代後期にオランダの医学が日本に伝来して以後のことです。その当時まで、日本で一般に広く普及していたのは中国伝来の医学でした。

そこで、オランダから伝来した新しい医学と、それまでの中国伝来の医学とを区別するために、前者を「**蘭方**」と呼び、後者を「**漢方**」と呼ぶようになったのです。

「漢」とは中国を意味し、特別に漢の時代を指すわけではありません。また、「方」とは方技・方術の略で、医学を意味します。したがって厳密



に言うと、漢方とは「漢方医学」のことなのです。

しかし、漢方という言葉は「漢方薬」という意味で使うこともあるので、本書では、医学の話をするときには「漢方医学」と言い、薬の話をするときには「漢方薬」と言うようにしています（図 1.1）。

方剤と生薬

じつは、漢方薬という言葉の使い方にも少し問題があるので。

たとえば、葛根湯かっこんとうという代表的な漢方の「方剤（=処方）」ほうざいがあり、その中には葛根や麻黄まおうという「生薬（=天然薬物）」しょうやくが含まれています。そして、方剤と生薬のどちらも漢方薬と呼ばれているのです（図 1.1）。

そこで本書では、方剤と生薬の両方の意味を含ませたいときには漢方薬という言葉を使い、それぞれを区別する必要があるときには方剤と生薬という言葉に分けて使うようにしています。

方剤の大部分は煎剤せんざい（=煎じ薬）であり、散剤や丸剤はごく少数です。煎剤を毎日、自宅で煎じて服用するのは大変なので、日本では現在、手軽に服用できて、携帯にも便利なエキス剤（医療用漢方エキス製剤）が普及しています。

煎剤とエキス剤のメリットとデメリットを表 1.1 にまとめました。

表 1.1 煎剤とエキス剤の違い

	煎剤	エキス剤
メリット	種類が豊富である 臨床効果が優れている 香りの効果も期待できる 生薬の量を加減できる 構成生薬を去加できる	煎じる手間がかからない 携帯に便利である 品質が安定している 味がマイルドで飲みやすい 採用する医療機関が多い
デメリット	煎じる手間がかかる 携帯に不便である 品質が不安定である 味が強烈で飲みにくい 採用する医療機関がまれ	種類が限られている 臨床効果が劣っている 香りの効果を期待できない 生薬の量を加減できない 構成生薬を去加できない